

# しっかり者のすずの兵隊

DEN STANDHAFTIGE TINSOLDAT

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫



あるとき、二十五人すずの兵隊がありました。二十五人そろってきょうだいでした。なぜならみんなおなじ一本の古いすずのさじからうまれたからです。みんな銃剣をかついで、まっすぐにまえをにらめていました。みんな赤と青の、それはすばらしい軍服を着ていました。ねかされていた箱のふたがあいて、この兵隊たちが、はじめてこの世の中できいたことばは、

「やあ、すずの兵隊だ。」ということでした。このことばをいったのはちいぢやな男の子で、いいながら、よろこんで手をたたいていました。ちょうどこの子のお誕生日だったので、お祝にすずの兵隊をいただいたのでございます。

この子はさつそく兵隊をつくえの上にならべました。それはおたがい生きうつしにいていましたが、なかで、ひとりが少しちがっていました。その兵隊は一本足でした。こしらえるときいちばんおしまいにまわったので、足一本だけすずがたりなくなっていました。でも、この兵隊は、ほかの二本足の兵隊同様、しっかりと、片足で立っていました。しかも、かわったお話がこの一本足の兵隊にあったのですよ。

兵隊のならんだつくえの上には、ほかにもたくさんおもちゃがのっていました、でもそ

のなかで、いちばん目をひいたのはボール紙でこしらえたきれいなお城でした。そのちいさなお窓からは、なかの広間がのぞけました。お城のまえには、二、三本木が立っていて、みずうみのつもりのちいさな鏡をとりまいていました。ろうぎいくのはくちようが、上でおよいでいて、そこに影をうつしていました。それはどれもみんなかわゆくできていましたが、でもそのなかで、いちばんかわいらしかったのは、ひらかれているお城の戸口のまんなかに立っているちいさいむすめでした。むすめはやはりボール紙を切りぬいたものでしたが、それこそすずしそうなモスリンのスカートをつけて、ちいさな細い青リボンを肩にゆいつけているのが、ちょうど肩掛のようにみえました。リボンのまんなかには、その子の顔ぜんたいぐらいあるびかびかの金ぼくがついていました。このちいさなむすめは両腕をまえへのぼしていました。それは踊ッ子だからです。それから片足をずいぶん高く上げていますので、すずの兵隊には、その足のさきがまるでみえないくらいでした。それで、この子もやはり片足ないのだろうとおもっていました。

「あの子はちようどおれのおかみさんにいいな。」と、兵隊はおもいました。「でも、身分がよすぎるかな。あのむすめはお城に住んでいるのに、おれはたったひとつの箱のなかに、しかも二十五人いっしょにほうりこまれているのだ。これではとてもせまくて、あの



子に来てもらっても、いるところがありはしない。でも、どうかして近づきにだけはなりたいものだ。」

そこで兵隊は、つくえの上ののつているかぎタバコ箱のうしろへ、ごろりとあおむけにひつくりかえりました。そうしてそこからみると、かわいらしいむすめのすがたがらくに見えました。むすめは相かわらずひつくりかえりもしずに、片足でつり合いをとっていました。

やがて晩になると、ほかのすずの兵隊は、のこらず箱のなかへ入れられて、このうちの人たちもみんなねにきました。さあ、それからがおもちやたちのあそび時間で、「訪問ごっこ」だの、「戦争ごっこ」だの、「舞踏会」ぶとうかいだのがはじまるのです。すずの兵隊たちは、箱のなかでがらがらいいだして、なかまにはいろうとしましたが、ふたをあけることができませんでした。くるみ割はとんぼ返りをうちますし、石筆せきひつは石盤せきばんの上をおもしろそうにかけまわりました。それはえらいさわぎになったので、とうとうカナリヤまで目をさまして、いっしょにお話をはじめました。それがそっくり歌になっていました。ただいつまでも、じつとしてひとつ場所をうごかなかつたのは、一本足のすずの兵隊と、踊ッ子のむすめだけでした。むすめは片足のつまさきでまっすぐに立って、両手をまえに

ひろげていました。すると、兵隊もまけずに、片足でしつかりと立っていて、しかもちつともむすめから目をはなそうとしませんでした。

するうち、大時計が十二時を打ちました。

「ばん。」いきなりかぎタバコ箱のふたがはね上がりました。

でもなかにはいつていたのは、かぎタバコではありません。それは黒い小鬼でした。それから、よくあるバネじかけのびつくり箱だったのです。

「おいすずの兵隊、すこし目をほかへやれよ。」と、その小鬼こわにがいました。

でも一本足の兵隊はきこえないふうをしていました。

「よしあしたまで待つてろ」と、小鬼はいいました。

さて明るる朝になってこどもたちが起きてくると、一本足の兵隊は、窓のうえに立たされました。ところでそれは黒い小鬼のしわざであったか、風が吹きこんで来たためであったか、だしぬけに窓がぱたんといいて、一本足の兵隊は、三階からまつさかさまに下へおちました。どうもこれはひどいめにあうものです。兵隊は、片足をまつすぐに空にむけ、軍帽と銃剣を下にしたまま、敷しきいし石のあいだにはさまってしまいました。

女中と男の子は、すぐとさがしにおりて来ました。けれども、つい足でふんづけるまで

にしながらみつけることができませんでした。もし兵隊が大きな声で「ここですよう。」とどなったら、みつけたかも知れなかったのです。けれども兵隊は、軍服の手まえ、大きな声でよんだりなんかしてはみつともないとおもいました。

するうち雨が降りだしました。雨しずくがだんだん大きくなって、とうとうほんとうのどしや降りになりました。雨が上がったとき、ふたり町のこどもがでて来ました。

「おい、ごらんよ。すずの兵隊がいるよ。舟にのせてやろう。」と、そのひとりがいいました。そこでふたりは、新聞で紙のお舟をつくりました。そしてすずの兵隊をのせました。兵隊は新聞のお舟にのったまま、みぞのなかをながされていきました。ふたりのこどもはいつしよについてかけながら手をたたきました。やあ、たいへん。みぞのなかはなんてえらい波が立つのでしよう、流の早いといったらありません。なにしろ大雨のあとでした。紙の小舟は、上下にゆられて、ときどきくるくるはげしくまわりますと、すずの兵隊はさすがにふるえました。でも、やはりしっかりと立って、顔かおいろ色ひとつ変えず、銃剣肩に、まつすぐにまえをにらんでいました。

いきなりお舟は、長い下水の橋げすいの下へはいつていきました。それで、箱のなかにはいつていたときと同様、まつ暗になりました。

「いつたい、おれはどこへいくのだ。」と、兵隊はおもいました。「そうだ、そうだ。これは小鬼こおにのやつやつのしわざなのだ。いやはや、なさけない。あのかわいいむすめが、いっしよにのつていてくれるなら、この二倍もくらくても、ちつともこまりはしないのだが。」

こうおもっているところへ、ふと下水げすいの橋の下に住む大きなどぶねずみがでて来ました。「おい、通行証つうこうしょうはあるか。」と、ねずみはいいました。「通行証を出してみせろ。」

でも、すずの兵隊は、だんまりで、よけいしつかりと銃剣をかついでいました。お舟はずんずん流れていきました。ねすみはあとから追いかけて来ました。

うツふ、ねずみはきいきい歯ぎしりして、わらくずや木切れに、どんなによびかけたことでしょう。「あいつをおさえろ。あいつをおさえろ。あいつは通行税せいをはらわれない。通行証もみせやしない。」

でも、流れはだんだんはげしくなりました。やがて橋がおしまいになると、すずの兵隊は、日の目を見ることができました。でもそれといっしょにごうツという音がきこえました。それはだいたんな人でもびつくりするところですよ。どうでしょう、ちようと橋がおしまいになったところへ、下水げすいが滝たきになって、大きな掘割ほりわりに流れこんでいました。それは人間が滝におしながされるとおなじようなきけんなことになっていたのです。

でももうとまろうにもとまれないほど近くまで来ていました。舟は、兵隊をのせたまま、押し流されました。すずの兵隊は、でも一生けんめいつつぱりかえっていて、それこそまぶたひとつ動かしたとはいえませんが。お舟は三四ど、くるくるとまわって、舟べりまでいっばい水がはいりました。もう沈むほかはありません。すずの兵隊は首まで水につかっています。お舟はだんだん深く深く沈んでいって、新聞紙はいよいよぐすぐすにくずれて来ました。もう水は兵隊のあたまをこしてしまいました。そのとき兵隊は、かわいらしい踊ッ子のことをおもいだして、もう二どとあうこともできないとかんがえていました。すると兵隊の耳にこういう歌がきこえました。――

さよなら、さよなら、兵隊さん、

これでおまえもおしまいだ。

ちようどそのとき新聞紙がやぶれて、すずの兵隊は水のなかへ落ち込みました。――ところが、そのとたん、大きなおさかなが来て、ぱつくりのんでしまいました。

まあ、そのおさかなのおなかの暗いこと。そこは下水の橋下よりもっとまっ暗

でした。それになかのせま苦しいといったらありません。でもすずの兵隊はしつかりと立って、銚劍肩につツぱりかえっていました。

おさかなはあつちこつちとおよぎまわりました。それはさんざん、めちやくちやに動きまわったあと、きゆうにしずかになりました。ふと、稲妻いなづまのようなものが、さしこんで来ました。かんかんあかるいひる中でした。たれかが大きな声で、

「やあ、すずの兵隊が。」といいました。

おさかなは、つかまえられて、魚市場へ売られて、買われて、台所へはこぼれて、料理番の女中が大きなほうちようで、おなかをさいたのです。女中は、そのとき兵隊を両手でつかんでおへやへ持つていきますと、みんなは、おさかなのおなかのなかの旅をして来ためずらしい勇士をみたがつてさわいでいました。でもすずの兵隊はちつともとくいらしくはありませんでした。みんなは兵隊をつくえの上へのせました。すると——どうでしょう、世の中にはずいぶん奇妙なことがあるものですね。すずの兵隊は、もといたそのへやへまたつれてこられたのです。兵隊はやはりせんの子にあいました。おなじおもちゃがそのうえにのっていました。かわいい踊ツ子のいるきれいなお城もありました。むすめはやはり片足でからだをささえて、片足を空にむけていました。この子もやはりしつかり者

のなかまなのでした。これがすっかりすずの兵隊のころをうごかしました。で、もう少しですずの涙をながすところでした。でも、そんなことは男のすることではありません。兵隊はむすめをじつとみました。むすめも兵隊の顔をみました。けれどおたがいになんにもものはいりませんでした。

そのとき、ちいさい男の子のひとりが、すずの兵隊をつかんで、いきなりだんろのなかへなげこみました。どうしてこんなことになったのか、きつとかぎタバコの黒い小鬼こおにのしわざにちがいありません。

すずの兵隊はあかあかと光につつまれながら立っていました。そのうち、ひどいあつさをかんにて来ました。でもこのあつさはほんとうの火であついのか、心臓のなかの血がもえるのであついのか、わかりませんでした。やがてからだの色はすっかりはげてしまいました。でも、これも長旅のあいだでとれたのか、心のかなしみのためにはげたのか、それもわかりません。兵隊は踊ツ子の顔をみました。むすめも兵隊を見返しました。そのうちからだがとろけていくようにおもいました。でも、やはり銃剣肩に、しっかり立っていました。そのとき出しぬけに戸がばたんとあいて。吹きこんだ風が踊ツ子をさらいますと、それはまるで空をとぶ魔女まじよのようにふらふらと空をとびながら、だんろのなかの、ちよう

ど兵隊のいるところへ、まっしぐらにとびこんで来ました。とたんに、ぱあっとほのおが立って、むすめはきれいに焼けうせてしまいました。

するうち、すずの兵隊は、だんだんとろけて、ちいさなかたまりになりました。

そうして、あくる日女中が、灰をかきだしますと、兵隊はちいさなすずのハート形になっていました。けれども踊ツ子のほうは、金ばくだけがのこって、それは炭のようになつてくろにこげていました。







# 青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# しっかり者のすずの兵隊

## DEN STANDHAFTIGE TINSOLDAT

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>